

ポスト・オスマン期から世界大戦期に至る パリ都市空間形成と近代建築の展開

Development of Modern Architecture through the Urbanisme in Paris during the period of Post-Haussmann and the World Wars.

松本 裕(MATSUMOTO Yutaka)

機能性や均質化を旨とする近代主義的(モダニズム)建築・都市計画への反動や歴史的建築・都市の保存・再活用に対する機運の高まりから、1960年代以降にヨーロッパを中心に、都市を有機的存在として捉えようとする「都市組織」(tissu urbain / urban tissue)なる概念が生まれた。本研究の主目的は、歴史都市パリの再開発を「都市組織」の再編という観点から分析することである。その際、都市の歴史性とは「都市組織」の重層化のことであり、場所の固有性はその重層の仕方によるとの仮説を立て、パリ市の発展を跡付ける典型的な場所を選定し調査研究を行った。

3年間の研究期間の内、第1年目と第2年目は、中世の稠密な「都市組織」から近代化を図ったオスマンのパリ大改造を中心に調査研究を行った。その成果を踏まえ、最終年度となる2013(H24)年度は、「近現代の都市再開発において、既存の『都市組織』が都市基盤インフラストラクチャーとしてどのように捉えられ再編されたか」をテーマにフィールドワークを実施した。研究対象としては、既存の「都市組織」に強いインパクトを与えたレ・アール(Le Halles)地区での次の2度に渡る大規模再開発計画を取り上げた:【第1期】中世以来、市民活動の中心地として発展してきた当地区において、建築家ヴィクトール・バルタール(Victor Baltard, 1805-74)が設計した中央市場(1852-89)にかけて順次建設)の全面移転(1969)と解体(1971)に伴う再開発が実施された。この再開発に危機感を持ったフランソワーズ・ブドン(Françoise Boudon)教授らのレ・アール調査がフランスにおける「都市組織」研究の嚆矢となった。【第2期】第1期の結果、1970年代末から80年代にかけて建設された「フォーラム・デ・アール」(Forum des Halles)一帯の21世紀全面刷新計画が進行中である。2003年に指名設計競技が開催され、2004年に受賞案が決定するもパリ市の了承が得られず、2006年10名の建築家による国際設計競技が新たに実施され、2007年パトリック・ベルジェ(Patrick Berger)らの「天蓋(canopée)」案が最終的に採択された。豊かな木々の緑で構成される当採択案では、既存の「都市組織」にエコロジーという新しい現代的要素の導入が目指されている。

このように、1970年代にパリ最大の再開発を施された場所が、今日早くも次の再開発のターゲットとなっている。よって、これらの再開発は、同じ場所でありながら、近代主義(モダニズム)の時代と現代の双方の都市整備の理念を顕著に反映した事例であると捉えられる。本研究では、両時期の地籍図や設計図面を一次資料として、各「都市組織」の図化(GIS 援用)を試みた。筆者は、ブドン教授から資料分析や図面復元方法等の直接指導を受けて研究を進めてきた。当研究により、ブドン教授らが作成した一連のレ・アール地区の「都市組織」図(1970年代迄)に、新

たに上述の 2 つの時期の再開発事例を反映させることができた。またそれらを、筆者がこれ迄取り組んできたパリ市第 II 区(レ・アール地区の北に隣接)の「都市組織」図と合体させることで、セーヌ川からシャルル 5 世の市壁までが一続きの図となり、パリ市の典型的な都市発展について連続的に図化・分析することが可能となった。なお、レ・アール地区は、第 2 期の現代再開発が当研究期間終了後の現在も進行中であり、その進捗状況を継続調査している。